



メール マガジン版 音楽の世界

第 6 号 日本音楽舞踊会議 (CMD) 2004 年 4 月 4 日 (日) 発行

The COMMITTEE of MUSIC and DANCE JAPAN

〒 169--0075 新宿区高田馬場 4-1-6 寿美ビル 305 号

TEL:03-3369-7496 FAX:03-3369-6870

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/> E-mail: onbukai@mua.biglobe.ne.jp

メールマガジンの発行にあたって 事務局長：中島洋一

この度、メール・マガジン版『音楽の世界』を発行することとなりました。

こメール・マガジン発行の目的は、日本音楽舞踊会議とい団体およびその活動内容を紹介すること、そして機関誌『音楽の世界(活字版)』の内容を紹介することが、主な目的ですが、それだけではなく、読者に自由に投稿してもらい、それを分け隔てなく読んでいただく雑誌として発展させていきたいと考えています。

もちろん、この雑誌は申し込めば、どなたでも自由に購読出来ますし、購読の打ち切りも自由です。

発行回数など今後のことはまだ未定ですが、活字版『音楽の世界』の月刊に対して、このメルマガ版『音楽の世界』の発行は不定期とし、大体年に5～6回程度の発行をめざしたいと思います。文書の形式については画像などを簡単に取り込める長所があるHTML形式も検討しましたが、文書サイズ、汎用性の両面を考え、テキスト形式でスタートすることにしました。

また、このメルマガは日本音楽舞踊会議関係者だけではなく、読者のみなさんと一緒に発展させて行く雑誌にして行きたいと考えておりますので、みなさま方のご協力をよろしく、お願い致します。

このメルマガに記事を掲載したい人、また購読を進めたい人がおりましたら、事務局長にメールをお送り下さい。

メールの宛先：中島洋一 yoichi_n@wa2.so-net.ne.jp

+++++

メールマガジン版 『音楽の世界』第6号 内容

第6号は『Fresh Concert -CMD2004- ～より豊かな音楽も未来をめざして』のための特集号とし、量的には通常の半分以下に納めました。

- 1) ごあいさつ
- 2) 当日の演奏曲目

3) "Fresh concert -CMD2004-" 出演者の言葉

4) 座談会 ("Fresh concert -CMD2003-" から

5) "Fresh concert -CMD2004-"のご案内

6) 会と会員のコンサート日程表 (4 ~ 6月)

1) 会と会員のコンサート日程表 (3 ~ 5月)

2) 劉備さんのホームページ開設のお知らせ

3) 読者からのお知らせ

1) ごあいさつ

"Fresh Concert"- CMD 2004 -

~ より豊かな音楽の未来をめざして ~

2004年4月6日(火) 18:30 開演

めぐろパーシモンホール 小ホール

主催：日本音楽舞踊会議 / 後援：月刊『音楽の世界』

当日券：2800円(全自由)

最近になり、やや回復の兆しが見えて来ているといえ、今、我が国は経済的にも厳しい状況にあり、音楽界もその影響を受け、特に音楽的に成長途上にある若い人達にとって音楽活動を継続することが、かなり困難になって来ております。そういう中で、才能、可能性を秘めながらも、音大などを卒業した後、経済的な理由等でステージから遠ざかり、折角の才能を開花させることなく終わってしまう若い音楽家達が多く見受けられますが、そのような時代だからこそ、若い人達に無理なくステージに立てるような場を提供し、若い才能を発掘、育成することも、長い歴史を持つ音楽文化団体としての本会が果たすべき社会的、文化的使命の一つと考え、昨年 Fresh-concert コンサートを企画し、今回が2回目となります。

今年は11人の参加者(伴奏者を含めて14人)がいましたが、ロシア、ルーマニアの方も加わり、多彩な顔ぶれが揃いました。才能に恵まれた方々も多く、全員がこのコンサートを目指して研鑽に励んでまいりましたので、若々しい熱気に溢れた素晴らしいコンサートになるものと期待しております。いま巢立とうとしている若い音楽家達に対して、皆様方の惜しみない御支援とご声援をお願いするとともに、これからの彼らの活躍を暖かく見守り続けていただきたいと思います。

日本音楽舞踊会議 代表委員：助川敏弥、深沢亮子

事務局長：中島洋一

公演企画部長：北條直彦

2) 当日の演奏曲目

高橋 絵里(ピアノ)

ショパン ソナタ 口短調 作品58より、第1、第4楽章

鈴木 文(ソプラノ) ピアノ 松本 智恵

ベッリーニ オペラ『夢遊病の女』より

"私にとって今日は何とすばらしい日"

相澤 沙代(ピアノ)

プロコフィエフ ソナタ第7番 作品 83
金子 直美(ソプラノ) ピアノ 青木いづみ
マスカーニ 『アヴェ・マリア』
ドヴォルザーク オペラ『ルサルカ』より "月に寄せる歌"他
植田 さや香(ピアノ)
浅香 満 バラード
スクリャービン ソナタ第4番 作品 30

----- 休憩 -----

神尾 弥(打楽器)
向井 耕平 「前奏曲とアレグロ」 ~ マリンバのための 作品 19
北川 葉子(ピアノ)
ラフマニノフ コレルリの主題による変奏曲 Op.42
矢数 典子(ソプラノ) ピアノ 藤川 志保
モーツァルト 歌曲 ルイーゼが不実な恋人の手紙を焼いた時 K.520
モーツァルト オペラ『フィガロの結婚』より
「スザンナは来ないかしら」~「楽しい思い出はどこへ」
山口 有希子(ピアノ)
ショパン マズルカ 作品 50 - 第3番
ショパン ポロネーズ 第7番『幻想』 作品 61

ユリヤ・スメタンキナ(フルート)
アウラ・ヴァージニア・ポペスク(ヴァイオリン)、植田 さや香(ピアノ)
ブラームス ハンガリア舞曲 第1番、第5番

司会：西山 淑子

3) "Fresh concert -CMD2004-" 出演者の言葉

《高橋 絵里(たかはし・えり) / ピアノ》

初めてフレッシュコンサートに参加させて頂きます。声楽や様々な楽器を演奏される方々と共に舞台に立てることを、とても心待ちにしております。

コンサートで演奏します「ショパンのソナタ第三番」は、鍵盤から溢れ出る音楽そのものがこの上なく美しい作品です。ショパンによって紡ぎだされたこの美しい音楽を、お客様と分かち合うことができましたらこの上ない喜びです。

+ + *+ +* *+ +* *+ +* *+ *+ +*

《鈴木 文(すずき・あや) / ソプラノ》

『今回、フレッシュコンサートに出させて頂くことができ大変嬉しく思っています。色々な楽器の方たちと同じ舞台立つことがあまりなかったので、本当に楽しみです。ベッリーニの「夢遊病の女」の中のこのアリアは、アミーガナがエルヴィーノと婚約を交わす場面で歌われる歌で、祝ってくれる友人や親への感謝と、愛する人と結ばれる喜びに溢れた曲です。

当日は、お客様にもしあわせな気持ちを味わっていただけるよう、精一杯歌いたいと思います。』

+ + *+ +* *+ +* *+ +* +* *+ +*

《金子 直美（かねこ・なおみ）/ソプラノ》

この度、このフレッシュコンサートに出演させていただくことになり、とても光栄に思っております。

今回は、私の大好きな2曲、マスカーニ作曲 アヴェマリア、ドボルザーク作曲 歌劇『ルサルカ』より「月に寄せる歌」の2曲を演奏させていただきます。

私が歌を始めてから今年で10年程経ちますが、やればやる程音楽の奥深さがわかり、一生勉強だなあと改めて思う今日この頃です。今回歌わせて頂くアヴェマリアは、私が音高に通っていた頃に一度歌った事がありますが、勉強し直してみますと更に高度で全く違った音楽に感じられました。

まだまだ技術的には未熟ですが、聴きにきて下さる皆様に喜んで頂けるような演奏が出来るようこれからも日々努力していきたいと思っております。

+ + *+ +* *+ +* *+ +* +* *+ +*

《神尾 弥（かみお・わたる）/打楽器》

出演に寄せて...

今、様々な事が興る世の中で、目紛しく変化する地球。壱、人間として。また音楽に携わっている、壱、音楽人

として。ナニカを発信出来る地球人でありたいと憶う。昨年のある日、ある場所に足を運んだ。その日は少しだけ曇

っていて、少しだけ寒い日だった。そこには、今出来ることを精一杯、発信している多くの空気があった。その中に

居る自分。人、各々にとって幸せなコト。幸せなモノ。自分が生まれ育った環境に居ると忘れてしまいがちな何かを

、大切にしたいと想う。19歳の時、初めてこの楽器に出会い、以来、その存在自体に触れることにより発信出来る「

ナニカ」に引き付けられたように感じる。とてもシンプル。故に何百通りもの「自由」を放っている。

そんな中の何かひとつでも、どこかに響いてくれたなら.....

神尾 弥（かみおわたる）

1978 生まれ、埼玉県出身。2001 年、国立音楽大学卒業。これまでに、百瀬和紀、M.Udow、D.DeSena、新谷祥子の各氏に師事。2002 年、米国生活を経て、昨年 12 月、リサイタルを開催。現在、音楽と空間による舞台芸術をテーマにフリーで活動。埼玉新演奏家連盟々員。

+ + *+ +* *+ +* *+ +* +* *+ +*

《北川 葉子（きたがわ・ようこ）/ピアノ》

このたびフレッシュコンサートに参加させていただいて大変嬉しく思っております。

今回演奏するラフマニノフの「コレルリの主題による変奏曲」(1931)は、ラフマニノフがロシアから亡命した後に書いた作品です。祖国ロシア・ソ連に復帰することを強く願いながら、しかし祖国への帰国が絶望的となった後に書かれた、ピアノ独奏曲最後の作品です。

亡命後のラフマニノフの作品には、祖国に戻れない不安感や孤独感といった心情が 作品に反映され、故郷ロシアを回想させるような物思いに沈んだ瞑想的・叙情的な性格がより色濃く見られます。この「コレルリの主題による変奏曲」もそのひとつです。

原曲はA・コレリ（コレリ）のヴァイオリンと通奏低音のための「ラ・フォリア」という曲で、この曲を主題として20の変奏と間奏曲・コーダを持つ大変大きな変奏曲です。大ピアニストでもあったラフマニノフが様々な要素をおりまぜて感情を表現しているので、テクニク的にも大変技巧的です。

今回の演奏でラフマニノフのメランコリックな響き、ダイナミズム、軽妙さ、深刻さなどから、ラフマニノフの音楽の持つ心情を感じていただけたら幸いです。

+ + *+ +* *+ +* *+ +* +* *+ +*

《矢数 典子（やかず・のりこ）/ソプラノ》

この度フレッシュコンサートに出演させて頂けることになり嬉しかったです。ちょうど卒業して演奏の場が少なくなっていたところだったので。今回演奏する曲は私が一番好きなモーツァルトの曲です。好きだからと安易に決めてしまいましたが、思ったより難しくて苦心してます。今回歌う2曲ともつらい恋の歌です。一曲めの『ルイーゼが不実な恋人の手紙を焼いたとき』は恋人からもらった手紙を焼いたけど、心にはずっとながい間心に残れだろうという曲です。もう一つのARIAは夫の浮気に悩む伯爵婦人が、嘆き、昔の楽しかった幸せな思い出を回想し、再び夫の愛をとりもどすと決心する曲です。どちらも女性の揺れ動く気持ちを歌っています。そのせつない気持ちをすこしでも表現できたらうれしいです。

+ + *+ +* *+ +* *+ +* +* *+ +*

《山口 有希子（やまぐち・ゆきこ）/ピアノ》

「昨年に引き続き、二度目の出演になります。前はクラリネットとのデュオでしたが、今回はソロで出演させていただくことになりました。アンサンブルとはまた違った難しさがありますが、楽しんで演奏できたら、と思います。」

+ + *+ +* *+ +* *+ +* +* *+ +*

《植田 さや香（うえだ・さやか）/ピアノ》

昨年に引き続き、出演させて頂くことになりました。今回は、ソロとトリオの両方での出演ですが、それぞれ違った面白さがあるので、楽しく演奏できるように頑張ります。

4) 座談会 ("Fresh concert -CMD2003-" から

この記事は『音楽の世界』2003年3月号に掲載されたものです。
今年度の座談会の記事は、コンサート当日配布される
『音楽の世界』2004年4/5月号に掲載されています。

座談会【Fresh Concert - CMD2003 - 】
出演者が自分の音楽を語る

【出席者】

岩間俊恵（ピアノ）、植田さや香（ピアノ）、小道一代（メゾ・ソプラノ）、
戸田竜太郎（クラリネット）、松浦豊彦（バリトン）
吉松亜衣（ソプラノ）、山口有希子（ピアノ）
野口剛夫（『音楽の世界』編集長）
松山 元（日本音楽舞踊会議・事務局次長 ピアニスト）
【司会】：中島洋一（日本音楽舞踊会議・事務局長 作曲家）

2003年2月2日 池袋 としま生活産業会館 7F 第一会議室にて

演奏曲目について

【司会】お集まりいただきましてありがとうございました。本日は3月19日に開催される音舞会主催コンサート『“ Fresh Concert ” -CMD2003- ~より豊かな音楽の未来をめざして~』にご出演の皆様、今回のコンサートにかける抱負などを中心に、ご自分の音楽について語っていただきたいと思ひます。では、まず都合でどうしても途中退席されるという吉松亜衣さんにお話しを伺いたいと思ひます。

吉松さんは途中でプログラムを変更されましたね。かなりの大曲に挑まれることになったわけですが、まず曲目を変更した理由についてお伺ひしたいと思ひます。

《吉松》大曲を歌おうとかいうことを特に意識したわけではないのですが、以前選んだ曲よりこの曲の方が自分にとっても勉強になるし、自分の声を生かせるのではないかと思ひて変えました。

【司会】この曲は難しいコロの部分があるけど、そういうものが得意なんですか。

《吉松》得意ではないんですけど、今、勉強中なので...

【司会】その他に今回のコンサートでこんな冒険を試みたいとか、将来的にはこんなことをやってみたいとかいうことがありますか？

《吉松》試験とかコンクールでない演奏会に出していただくのは久しぶりなので、演奏しながら楽しめたらいいなと思ひます。

【司会】そうですね。いかに巧く演奏しようとか、いい点を取ろう、などという意識が先行すると、音楽が窮屈で味気なくなってしまう、それが聴衆に伝わり聴き手の心を醒めさせてしまうおそれがあるので、そういう気持ちでやってみていただくのがよろしいでしょうね。

【司会】ではプログラム順に、次は松浦君。今回はシューベルトを三曲歌うわけですが、シューベルトを選んだ動機と、貴男がシューベルトをどのような表現したいかを、お話し下さい。

《松浦》シューベルトの曲を選んだ理由は、多くの作曲家の中でシューベルトが一番好きだからですが、シューベルトの歌曲の中でも、素朴な感じのするものを選んでみました。

【司会】シューベルトは素朴といっても、例えばどんどん転調するようなどころなどに非凡な感性の閃きを感じさせるものがあるんだけど、そういうことも意識しますか。

《松浦》はい、転調はシューベルトの最も特徴的な要素の一つだと思うんですけど。

【司会】そういうものによって生ずる陰翳を歌で表現するという事はなかなか難しいことなんだけど、とにかく、好きなものを歌うんだから期待が持てそうですね。もちろん、音楽を勉強して行くに従って、いままで好きではなかった作曲家の作品についてもその良さが判るようになり、自分のレパートリーが広がって行くというようなことも大切なんだけど。

【司会】では、植田さや香さん。スクリャーピンをお弾きになるんですけど、彼の特徴が出始めた中期の作品と、完全に彼特有の様式で書かれた後期の作品（ソナタ第9番）を選ばれましたね。

《植田》あんまりスクリャーピンを弾いたことはないんでよく判らないんですけど。前に1回スクリャーピンを弾いた時に難しかったので、もっと弾けば好きになるんじゃないかと思ひて選びました。

【司会】今までに何を弾かれたかということについて、松山さんの方から質問して下さい。

《植田》二番（ソナタ）です。

【松山】 まだ、その作品はショパンの影響範囲を出てないんじゃないですか。

【司会】初期の作品だとまだショパン的な作風なんですけど、だんだん変わってきて、9番になんか

なると凄く違いますね。例のスクリヤーピン和音で書かれていて、トニックに行かないような作風になって行く。そういうのがお好きなわけですか？

《植田》特に、何が好きとか何が嫌いだということはあるまいんですけど。

【司会】そうですか。では、次は岩間俊恵さんですね。とても珍しい曲で、私も知らなかったんだけど、メトネルには『忘れられた調べ』というタイトルの曲が3つあるみたいですね。そのシリーズの最初の曲ですか？

《岩間》そうですね。

【司会】憂愁の情に満ちた曲という感じがしますが、書き方はかなり自由ですね。

《岩間》そうですね。構成はそんなに難しくありません。先ほど初演されたというお話を（松山氏から）伺い、大変な曲を選んでしまったな、と思ってしまっただけ。

【松山】いえ、私が初演したのは d-moll の曲です。当時は楽譜がなくて、ロシアからメトネルの全集を取り寄せました。NHKの新人演奏会での演奏だったんですが、それが私のデビューだったのです。あとで調べてみたら日本初演ということでした。今は日本でもメトネルの楽譜がどんどん出ていますが、佐々木弥生子さんという以前この会に入っていた方が校訂をしています。それから、この曲はギレリスが良く弾いてますね。カーネギーホールのリサイタルなんかで、それで有名になったんですね。

【司会】日本ではあまり演奏されませんね。

《岩間》でも、メトネルの曲の中では一番弾かれています。

【司会】ロシアでは結構演奏されるんですか？

《岩間》最近ですね。やはりラフマニノフの影に隠れていて...

【司会】敢えてこの曲をお選びになった理由は作曲家に興味を持ったからですか？

《岩間》まだ、興味を持ち始めたばかりで、これから色々知りたい作曲家なんですけど、とにかく好きなんです。一回聴いて惹かれて、弾きたいなあって思いました。

【司会】隠れた名作を紹介していただくことは音楽文化を広げることになり結構なことだと思いますし、大いに期待しています。

【司会】次は戸田君と山口さんですね。ブラームスの二つあるクラリネットとピアノのソナタのうちの第二番を選ばれましたね。この二つは最晩年の作品で私も好きなんですけど、他にもクラリネットとピアノのための作品は一杯あるのに、この曲を選ばれた理由は？

《戸田》まず、クラリネットのソナタだけでなく、管楽器のソナタ全体を見ても、ピアノとソロ楽器が対等に扱われている作品はあまりないと思うんです。このブラームスの二つのソナタは、僕らクラリネットをやっている連中は「クラリネットの伴奏付のピアノソナタ」だと冗談を言うくらいピアノが重要な働きをするんです。今回、この演奏会に出演するに当たって、二人で出るという条件だったので、それを考えると一番相応しいのがこの二曲だと思いました。それで一番（ハ短調）の方は、曲の冒頭なんかでもシリアスで重々しい感じがするんですけど、二番の方はがらりと変わって柔らかく優しい感じがして、どちらかといえば聴きやすいかなと思って、こちらを選びました。

【司会】ブラームスの叙情性と円熟を感じさせる作品だけど、おっしゃる通りピアノのパートが重要ですよ。では、ピアノをお弾きになる山口さん、どうですか？

《山口》自分の好きなものを演奏して良いと言われたので、私はアンサンブルがやりたいと言ったんです。それを戸田君に話したら、「じゃ伴奏じゃなくて対等にデュオとしてやれる曲をやりよう」ということになって...私はこの曲を知らなかったんで、今練習しているんですけど、難しいですね。

【司会】いい曲ですよ。でも知らなかったのに、やってみて良い曲だったら、レパートリーが増えていいんじゃないですか？

《山口》はい。

【司会】では、また、後で伺うことにして、次はコンサートでは「トリ」の小道さん。あの、ちょっと貴女の演奏時間が長いと思いますが。

《小道》すみません。

【司会】実は、恥ずかしながら私はコープランドの作品は器楽の曲を聴いているだけで、歌曲は聴いていなかったんですけど、CDで聴いてみると、とても親しみやすい曲ですね。

《小道》私もアメリカに行くまでは、プラスバンドとかオーケストラ・オンリーの作曲家だと思っていたんですけど、アメリカに行きますと結構声楽曲もやってまして、最初は取っつきにくかった

んですけど、歌ってみて美しいなと思ったんです。そこで初めて興味を持ちまして、特に有名なのはディキンソンの「12の詩による」というのがありまして、それはオーケストラバージョンのものもあるんですけど、ピアノバージョンの12曲もありまして、それをアメリカで何度か歌わせてもらいました。その後、この古いアメリカの歌というのがありまして、これはアメリカ人なら誰でも一度は聴いた事があるような、賛美歌とか民謡、童歌のようなものをコーブランドが編曲したものです。第一集と第二集があるんですけど、その両方から自分が好きなものを4曲選びました。アバウトな性格なものだから10分くらいで収まると思って(笑い)。一曲一曲が短くて、メロディーはみんな知っていて、編曲がちょっと素敵だな、という曲集なんですけど、歌うたびに新しい発見があるので、今回も新しい発見が出来たらいいなと思って選ばしてもらいました。

【司会】親しみやすい曲だし、上手にお歌いになると思うんで、お客様が飽きる事はないと思うんだけど、曲間を入れると12分くらいになると思います。もう、チラシも出来たし、削るのは難しいかと思えますけど。(笑い)

ところで、これまで出演者の方々にざっと語っていただいたんですけど、このへんで松山さんに先輩演奏家としてのアドバイスをお願いしたいと思います。

【松山】 そんな僥倖なことは申し上げられませんが、ご自分の好きな曲を演奏されるということはとても大切な事だと思います。私なんかは、仕事で自分が弾きたくもない曲を弾かなければならないことが多いのですよ。現代音楽なんかを仕事でよく弾くんですけど、それに共感を持とうと努力はするんですけどね。職業音楽家というものはギャラをもらって弾くのが本来のあり方だし、皆様もそれをお求めでしょうけど、そうなったとき、自分が弾きたい曲を弾ける機会が殆どないと思うんですよ。「私はこれを弾きたいからお金を下さい」、と言えるためには違う意味でのキャリアが必要でしょうし、そうなるには、ある程度の運も必要でしょう。ですから「これが弾きたい、これが歌いたい」というものを選んで、それを通じて勉強して行ける今度のような機会を持つ事は、将来への指針を得ることにもつながり、とても良い事だと思うんですよ。どうかこれを機会に、気持ちを新たに音楽を続けるようにしていただきたいと思えます。

【司会】では次に、このコンサートに対する機関誌のケアについて編集長からお話し願います。

【野口】 3、4月合併号に、この座談会の記事と、プログラムを掲載します。プログラムには主演者の写真と、略歴だけではなく、やや小さめですが伴奏者の略歴と写真も掲載します。曲目解説は、編集スタッフの湯浅玲子と道下京子が担当します。

【野口】 また、コンサート終了後の5月号に、コンサートの報告を掲載します。

自分が考える音楽とは

【司会】では、そろそろかた苦しい話はやめて、ザックバランに行きましょう。ところで私も音楽家ですが、演奏家ではないので、普段は演奏はしないんですが、たまに内輪な音楽会で歌の伴奏やピアノ連弾を弾いたりする事があります。そうすると、間違えるはずがないと思える簡単なところで、意外にミスったりするんですよ。だから演奏するという事は大変なことだなと思えますね。もちろんミスしない方がいいんだけど、ちょっとしたミスに怯えて、音楽的な説得力を損なわないようにして欲しいと思います。経験を積んだ演奏家は少々ミスしても、音楽を壊さないですよ。ところがそうでない人はそこで音楽を壊してしまうんです。そうなるひとどく興ざめになってしまうんです。

ではシューベルトが好きな松浦君に、自分がイメージしているシューベルトについて、語ってもらいましょう。(問)作曲家という人種はピアノが達人な人は多いんですけど、普段不規則な生活をしているせいか歌の好きな人は多くとも声のいい人は少ないんですよ。でもシューベルトとカリヒャルト・シュトラウスはとても良い声で歌っていたと聞いています。シューベルトの歌のパートをみると自分が歌いやすい音域で書いているような気がする。テノールだったんじゃないですか?《松浦》ある程度、歌の技術も判っているんじゃないかと思えますね。

【司会】プッチーニやヴェルディにしる、声楽曲を多く書いた人は声の事はよく判っていたと思います。でも、シューベルトの場合は声を出して歌っていたような気がしますね。それから彼の音楽は旋律だけでなく転調や和声法なんかも、非常に斬新なんですけど、ひねって出て来た音楽ではなくて、流れ出てくるような感じですね。

《松浦》頭で考えて意図的に作るのではなくて、音の流れが内面的必然性を持っていて、自然な感じがします。

【司会】そういうタイプの作曲家だったんでしょうね。だから、歌の方もあまり意図的に作りすぎないで、シューベルトの発想にそった歌い方をしたいということですか。

《松浦》そうですね

【司会】では吉松さんどうですか？実は私はあんまりベッリーニは知らないんだけど、聴いてみるとそれほどつまらない作曲家ではないですね。それからCDで聴いてみてもコロの部分なんかは、自分の声を生かすために自分流に歌っているのか、歌手によって違って違いますね。貴女も自分の作ったヴァージョンで歌うんですか？

《吉松》いいえ、そこまでは、まだ。

【司会】他にどんなオペラが好きですか？

《吉松》プッチーニとかです。ヴェルディは苦手なんです。プッチーニは年齢的にまだ無理があるんじゃないかと思って、今は、ベッリーニとかドニゼッティとかロッシーニとか、そのへんを中心に勉強しています。ロッシーニは自分の思うようには歌えないんですけど、ベッリーニは歌えないなりに、自分の声が良い方に向かっていくような気がしたんで、それに決めました。

【司会】低い音が苦手なんですか？

《吉松》中間音（中域）が苦手で、低い方はそれなりに出るんですけど。

【司会】プッチーニなんかはどうですか？声楽的には難しいけど、表情的には掴みやすいでしょう。

《吉松》歌いたいという気持ちはありますけど、自分の感情に声がついていけないと、どんな演奏になってしまいますので、声をコントロール出来るようになって、表現に自分の声がついていくようになってから、歌いたいと思います。

【司会】今回は声楽の方が4人出演されるんですけど、みんなが欧米の作品を演奏されるわけですが、日本歌曲などについては、どう思われますか。

《吉松》やはり西洋音楽の発声は日本語向きではないと思うんです。母音と子音の問題もあるし、日本語で歌うと逆に言葉の壁があるように思います。

【司会】言葉の立て方の問題がですね。マイクを使って流行歌みたいな歌い方をすれば言葉が判るんですけど、西洋的な発声で歌うと、日本語が立てにくいですね。でも日本語が判るような歌い方もあるんですよ。そういうことも勉強して欲しいんですね。日本歌曲は、西洋のものに比べると、盛り上がりは少ないかもしれませんが、日本人はホントに相手が好きな時は、小さな声で「好き」って呟くように言うことが多いでしょう。感情が高まって行くと、かえって表現が内にこもって行くような感情表現の陰翳って、日本人特有のものでありますから、日本の歌曲にも挑戦して欲しいんですね。我々の会では、日本語に対する旋律のつけ方とか、日本語の歌い方、などに関する研究会もやっています。将来は日本の歌曲にも挑戦してみたいですか？

《吉松》将来的には、挑戦したいと思います。

【司会】小道さんどうですか。アメリカの歌を歌うわけですけど。

《小道》今回は、たまたま英語の曲なんですけど、私はオペラとか、ドイツ歌曲とか色々なジャンルのものをやっています。でも最近は、基本的には一緒だって思うようになって来ました。少し前までは日本語なら日本語に向いた発声、イタリアオペラならイタリアオペラに向いた発声という拘りがあったんですけど、声帯は一つ、つまり楽器は一つで、そこから色々なジャンルのものを歌おうとした場合、基本となるものを崩してしまえば、すべてがまやかしくなってしまいます。最近は、基本さえしっかりしておけば、どんなジャンルのものでも、自分の感性さえついていけばなんとかなると思うようになって。ですからあまり垣根を作らないようにしようと、考えるようになりました。実は、アメリカの歌を歌うのは久しぶりなんです。アメリカに居たのは十年以上前のことだし、日本に帰ってから歌う機会もなかったものですから。でも、ここに来て、自分のアイデンティティーの一つとして、アメリカのものを出して行ってもいいかなと思ったりして…。実は「Fresh Concert」になぞ出していただくのが申しわけないような年なんですけど、気持ちはいつもフレッシュでいます。

それで最近になってやっと、発声とかすべて含めて、「これだ」というのが少し見えて来たんですね。それがあって色々な枝葉が余裕を持って見れるようになって来て、だから、日本語のものも今は抵抗感なくやれます。少し前まではオペラの邦訳に対してもすごく抵抗があって、二期会の研

究生だった頃、最初にやるのが日本語に翻訳されたオペラなんですね。それがすごくヘンで気持ち悪くて嫌だったんですけど、最近はそれも別なものとして考えれば、そしてお客様達が喜んでくださるなら、それも有りかな、って思うようになって来て。

【司会】私がアメリカのスタンフォード大学へ行ったとき、そこで『魔笛』の公演を聴いたのですが、英語でやっているんですね。私は語学が弱いせいか、英語で歌ったのを聴いてもそんなにヘンには感じなかったんですけど、セリフの部分ではアドリブでギャグなどを入れると、聴衆がどっと笑うんですね。やはり自国語だと誰でも意味が分かるし、そういう面ではいいですね。ただ、私は日本語で歌うドイツオペラなどを聴くのは、あまり好きではないですがね。(ここで、吉松亜衣さんが都合で退席)セリフの部分ならいいんですが、歌の部分だとイントネーションなどがすごく違うんで、かなり不自然な感じがしますよね。でも、ずっと昔、ドビュッシーの『ペレアスとメリザンド』を日本語でやったのを聴いたことがありますけど、それほど不自然に感じませんでしたね。旋律の抑揚が小さいせいか、日本語でやってもそれほど違和感はないんですね。

《小道》語り物的なものですからね。

【司会】まあ色々な試みがあっていいですね。

では、次に器楽の人にバトンタッチしましょう。では植田さんから。スクリャーピンだけではなく、貴女の好きな音楽とか、やってみたいこととか、少し話題を広げてお話いただけますか。

《植田》音楽大学などで音楽の勉強したわけではないので、あまり曲は知らないんですが、楽しければいいなと思っていて、難しい曲でもなんでも……。もし、演奏することが自分の中で楽しくなくなれば止めます。

【司会】最初は、難しくて取っつきにくく感じた曲でも、やっているうちに楽しくなって来ることもあるでしょう。スクリャーピンはそんなに取っつきやすくはないのでは？

《植田》ええ、スクリャーピンは取っつきやすくはないです。でも、まだ始めたばかりだし、最初から苦手意識を持ちたくはないし、それに苦手かなと思っていても、弾くと曲は全部好きになるので、弾こうかなと思いました。

【司会】弾くと好きになるわけですね。その音楽が良い音楽なら、弾いているうちにその良さが大抵判って来るということですね。では、次に山口さん。

《山口》植田さんと感覚としては近いですね。私は音大に行っていながらあんまり勉強をしなかったんで、曲もあまり沢山は知らないんですけど、逆に先入感なく出来るから良いかなと思ったりして、その時に楽しく弾ければ良いかなという感じでやろうとしています。

【司会】ブラームス以外に演奏したいものがありますか。

《山口》その時に興味があったものを弾きたいと思います。今まであまり曲を自分で選んだ事はなく、先生から何曲か課題曲を与えられ、その中から自分が好きになったものを選んで弾くとかいうことが多かったものですから。

【野口】 他人の演奏に興味を持つ事はありますか？例えばCDとか演奏会とか

《山口》最近演奏会にも行くようになりましたが、自分にとっては『音楽は演奏するもの』という感じですね。

【野口】 例えば、なんかの曲を弾いて好きになったりするのは、乱暴な言い方ですけど、その音楽に惹かれたからというよりは、その音楽を他人が弾いているのを見て、自分ならこう弾くのにと、アスレチック的というか、肉体感覚といったものが先んじてるってことですか。

《山口》そこまでチャレンジャーばくはなくて、聴いていて、あー格好いいなあって思うんですけど。それは、その人がそのように演奏したその曲が良かったということで、自分の演奏とは違うなと思います。でも、まだ、わたしだったらこう弾くのにと思うことよりも、私にはここまでは弾けないな、と感ずることの方が多いです。

【野口】 人の演奏と自分の演奏の違いが出て来るもとは、どこらへんにありますか？美学的な問題になっちゃうけど、思考から来ないで、弾く場合の都合で、例えば難点をどう弾くかなどということで、解釈が違って来るんですか？

《山口》技術的な問題もあるけど、同じ曲を弾いても、その人の、性格とか感性で、違ってくると思うんです。

【野口】 自分の曲ではなく、ブラームスなら100年前の人の曲を弾くわけだし、その場合でも、もちろん直観的なものも大事だけど、意識的に追求しないと入っていけないところもあるんじゃないかな

いですか。

《山口》確かに知っている人だとか、今生きている人の曲だと、自分が何を書きたかったかリアルに伝えてもらえるという事はありますが、直接本人に聞けるわけではないけど、本人のものと、本人がこう伝えたかったのだらうという私の想像と、それに聴衆の期待が重なり合えば最高かな、と思ってます。

演奏家の個性とは？

【司会】いま、自分の演奏と、他人の演奏という話題が出たけど、戸田君は、これが自分の演奏だと強く意識する方ですか。それとも、自然に自分が出てくるならいいけど、自分の演奏ということあまり強く意識しない方がいいと思う方ですか。

《戸田》私は無理矢理に自分を出したがるのは良くないと思います。大学に行っていますと、「個性を出さなきゃ」ということで、本心ではそう思っていないのに、無理矢理にここはクレッシェンドしようとか、自分を大きく見せようとして、やらなくてもいいことをやりがちになってしまうんですけど、それでは、音楽が空虚になってしまうと思うんです。抑えようとしても、自分の中からどうしても出て来てしまうようなものが、本来の個性だと思います。

【司会】意識的に個性を出すのではなくて、無意識のうちに流れ出て来てしまうようなものが本当のものだということですか。

【野口】それもまた個性なんだろうけど、そういう風になっている周りの人なんか多くいますか。

《戸田》私が師事している先生など、そういう姿勢で演奏をされていると思います。でも、それだと派手ではなくなるんで、なかなか周りから注目されなくなってしまうんです。でも、私はそういう演奏が自分の目指しているものだと、最近思うようになりました。

【松山】難しい問題ですね。『個性とは何か？』ということは....、我々演奏家は作者と聴衆の間に入って仕事をする唯一の存在なんですね。その中であって、我々演奏家の個性はどうなるのか、また我々の使命としての個性は何か、ということですね。

いま日本では、幼児教育から社会の場まで、あらゆるところで「個性」ということが言われていますね。ところで、先っきから伺っていると、個人の感覚とか資質とかが言われていますが、それがそのまますぐ個性につながるわけではないと思います。音楽にしる何にしる、まず模倣から始まりますね。マーラーが「教育とは最高の範を示す事だ」と言っていますが、まず、自分が師事している先生から教わりますよね。それから作曲者からのメッセージを自分がどのように受け取るかということで、作曲者の自我と自分の自我との戦いがありますね。それをどういう風に享受し、どういう風に聴衆の前に出すか、それによって個性というものはまるで変わってくるんですね。演奏行為において「個性」という言葉の意味はとても難しく、安易に使えないと言葉だと思います。

私の場合は、まず作曲者のメッセージを全面的に享受しようします。その中から結果的に出て来たものが個性ではないかと思えますし、それが正しい行き方だと思います。自分の感覚というものだけをそこまで信じられるかということですね。日本は150年前に西洋音楽を受け入れ始めたわけですが、西洋と同じ歴史的土壌があったわけではなく、西洋音楽をやっている我々はある意味で根無し草ですよ。ヨーロッパの中からそういう土壌を意識せず、ある時に天才が現れることがあるかもしれない。けれど私は、我々は西洋音楽の伝統を紐解くところから始めるべきで、だからバッハもやらなければならぬ、モーツァルト、ベートーヴェン、ブラームスもやらなくてはならない、その延長上にショパン、スクリャーピンもあれば、シマノフスキーとか他の色々な作曲家の音楽がある。そういう勉強の手順を経る必要があると思います。でも、西洋音楽が定着してきた時代に育った今の若い世代の中には、もしかするとそういう手順を得ずに、西洋音楽のどの時代のどの作曲家に対してもいきなりチャンネルを合わせられるような感覚の持ち主もいるかもしれない。

【野口】環境的には整って来ているんでしょうけど。昔は技術的には今ほどではなかったにしろ、もっと日本なりに鬱勃たるものがあったような気がします。韓国や中国などの演奏を聴くと昔の日本のように荒っぽいところがあるかもしれないけど、音楽にとって一番大事なものは何かということを感じさせるようなものが、あるような気がします。それに内情を明かすとなんだけど、最近はこの会自体が、『フレッシュ』ということと大分ご無沙汰しているように思うんです。別に、事務局局長を批判するわけじゃないけど、若い人だけ集めれば「Fresh Concert」になるわけではないと思

うんでよ。どれが、『フレッシュ』で、どれが『フレッシュ』じゃないのかということは判りづら
いけれど、そういうことは年齢とは関係ないと思うんですよ。そこのところでもお話し合いがあ
ったら、面白いと思うんですけど。

フレッシュであることの条件とは

【司会】いま、松山さんから出たことは、個性というものは自分一人で作れるものではない、作品
や人間など、それぞれとの出会いの中で、どう挑みどう受け止めて行くか、その積み重ねで個性が
形成されて行くということですね。それに、個性は感性だけではなくて、誰でも自分は『こうあり
たい』というものがあって、それに一步でも近づいて行こうとするでしょう。そういう意志とい
うか、願望というものがないと、個性は構築されて行かないと思います。目標とするものと、自分を
比べて「自分はまだダメだなあ」と思ったり、「自分の演奏はこれでいいんだろうか」と迷ったり
疑ったりする。そういう時、他の人の意見に耳を傾けてもいいと思うんです。たまに人の意見は聞
かないという頑な態度を取る人もいるけど、それは逆に自信がないからだと思います。他人の意見
を聞いた上で、自分の考えと違ってたら、それはそれで、かえて自分というものがより見えて来
るんでいいでしょう。それに演奏するということは、人に聴いてもらう事でしょう。褒めてもら
っても、判ってもらえなくとも、けなされても、反応というものを通して自分も変わって行くんじ
ゃないかしら。こういうあたり前な表現になってしまうけど、音楽も人と人とのコミュニケーション
でしょう。

でも、当たり前じゃなく、より高いところを目指して火花を散らすことで、個性も成長し、熱気も
生ずる。その熱気があれば、フレッシュなんじゃないですか。70才になっても、自分はまだまだ
と、追い求める熱気を持ち続けられればフレッシュだし、二十才でもそういう気持ちが無くなれば
フレッシュではなくなる。だからさっき野口さんが言ったように『フレッシュ』かどうかは、物理
的年齢とは関係ないと思います。でも、若いということは、先に可能性を多く持っていることだか
ら、羨ましいですね。

【松山】 自己実現をしようという意志、つまり人間が生きている意味ですよ。そういう意味で
は我々三人ともまだ『フレッシュ』ですよ。(笑い)

【司会】岩間さん、どうですか

《岩間》私がやりたいことは何なのかということはずっと探していて、それが確立したわけでは
ないし、ずっと探し続けるのが私の音楽人生かなと思います。性格というものも重要な要素かもし
れないけど、やはり受け身ではなくて、何事においても向かって行きたいですね。与えられたもの
に満足するのではなく、自分から開拓して行きたいと思いますね。

【司会】そういう気持ちが無くなれば「フレッシュ」ではなくなるわけだし、そういう熱い気持ち
を持続できれば、「フレッシュ」であり続けることが出来るということだと思います。

芸術と実生活の折り合いについて

【司会】では最後に、実生活と自分の芸術との折り合いをどのようにつけて行くかという問題に触
れましょう。例えば楽聖といわれているベートーヴェンだって、若い頃、父親が失業し、十代から
家族を養わなければならないという現実にさらされ、それを切り抜けて来たわけです。今はこうい
うご時世だから生活と自分の芸術活動を両立させて行くのは特に特に大変でしょう。

《松浦》それは考えなくてはならない問題だと思います。生活のために必要なことと、芸術の分野
のように創造的なこととは、なかなか折り合わないものがあると思います。でも、なんとかそれを
両立させる道を探して行かなければならないと思っています。

【野口】 一番、その開離が甚だしいのは演奏家より作曲家なんじゃありませんか。

【司会】私はシリアス系、ポピュラー系などとジャンル分けするのは好きじゃないんですが、確か
にシリアス系の作曲家で、芸術的な作曲だけで食っている人は、世界的にみても殆どいませんね。
でも、作曲系の人間の場合、創造行為をめざして修練する中で培われてきた幅広い音楽能力を、色
々な音楽の場で活用出来るんですよ。私の場合は音大などで教えているわけで、生活の場が自分の
専門と近いところにあるわけです。それは、仕事と生活を両立させやすいんだけど、逆に近か過ぎ

るが故に、生活のための仕事と割り切る事が出来ずに、義務感や責任感から、ついそちらの方にエネルギーを注ぎすぎてしまい、ある時ふと、本来やるべき自分の仕事をまだ殆どやっていないことに気づき、唖然とすることがあります。それなら、アイヴズのように、実業家兼作曲家といった生活の方が良かったかなと思ったりしますが、でも音楽で生活している方が、やはり幸せなんでしょうね。

【松山】 アイヴズのように大金持ちだったら、誰でもそうしますよ。

【司会】我々は大金持ちではないので、稼がなくては生きていけませんね。(笑い)

【松山】 生活することと、自分のやりたい事、つまり音楽をやって行く事は二律背反ですよ。どのようにそれを乗り越えるかということは、個々の生き方にもかかってきますね。アメリカの詩人にフロストという人がいましてね。この方は幸せな人で、こんな詩を書いています。「私には色んな道があったかもしれないけど、たった一つの道しかなかった。両目があっても見るものは一つであるように。」つまり、詩人として生きる事と、詩人として生きて行く事とを一体化出来たということですね。生活のために色々汚い事もやりましたし、奥さんが二人いたり、株をやったりして、年収が今のお金に直して一億円もあつたりしたらしいんですけど、それでも自分のやりたい事することと、お金を稼ぐ事が一体化していたらしいんです。でも、一体全体、そんな人間が音楽界だけでなく、この世の中にどれくらいいますか。

【司会】少ないでしょうね。

では、小道さんどうですか、生活と芸術との折り合いのつけ方について。

《小道》難しいですね。私は生活のために、音楽と関係ない仕事とか、自分がやりたくない仕事をやっていた時期があるんですけど、まず気力がついていかなくなるんですよ。それにやりたくないと思いつつやっている仕事は糧にはなっても、たとえ聴いてくれる人が小学生であっても、誰に対しても良くもなく、自分に対しても良くないので、引き受けられなくなったら、収入ががたっと落ちて、それで関係ない仕事をやったんですけど、難しいですね。

【野口】 何にも関係ない仕事だと、普段の練習にも差し障りがあるでしょう。

《小道》そうですね。そのことで消耗してしまうんですね。声楽家というものは心の持ちようがそのまま声に出してしまうんで、歌うのが辛くなってくるとか、声が重くなるとか、それに歌いたいという能動的な衝動もなくなってしまって、辛くて辛くてという方向に行ってしまう。でも、それを巧く切り抜けている方も大勢いらっしゃるんですけど、私の場合は性格もあつてか、それが出来なくて。

【野口】 でも、今まで無事に凌いで立派に生活して来れたわけですから。

《小道》でも、いろんな援助があつたからですよ。

【野口】 そういう援助を引き出すのも能力のうちだから。

《小道》でも、この問題は、ずっと解決しない問題で、今日も明日も考えていかなければなりません。

【司会】私が知っている先輩作曲家のMさんは、総合大学で高分子生物学を研究されていて、そちらでは、作曲もする生物学者と言われているそうですけど、作曲仲間のところでは、生物学もやる作曲家と言われるんです。でも、彼は「自分は頭の切り替えが早いんで、その場によって頭をすぐ切り換えられる」とい言うんですよ。おそらく、作曲の方がより好きなんだろうけど、生物学にも興味を持ち続けているんでしょうね。では、他の人どうですか。

《植田》まだ演奏家としてのキャリアが浅く、あまり困ったこともないんで、よく判りませんが、将来困ったら音楽と全然関係ない仕事もすると思うんですよ。そういうことも嫌いではないし。

《山口》私は、音大を卒業してから、特に定職にもつかず、そうかといって演奏家としての仕事が入って来るわけでもないんで、ピアノとは関係ない普通のアルバイトをしているんですが、音大を出た人より普通の大学を出た人の方が生活面では自立はしやすいようですね。自分のやりたいことと生活の折り合いをつけるのは難しいし、親の援助を受けるにも開き直らないと出来ないし、それに仕事と勉強の境界線がなく、お金にならなくても勉強になれば、やらなくてはならないし、でも、いつまで、お金をもらわないで勉強していれば、生活できるのかということで不安はありますね。

【司会】だんだん、そういう問題も自分で処理して行かねばならなくなるでしょうし、それは茨の道でしょうけど、そうなる前からあまり深刻に考えすぎるよりも、なったら、なつたでその時に、という気持ちでいた方がよいのかな。

《小道》あんまり考えすぎると、音楽を止めようかな、という気持ちになってしまったりして。

【司会】戸田君どうですか

《戸田》あの音楽に限らず絵でもなでも、芸術は職業にはならない、つまり芸術はお金にはならないと思うんです。逆に、お金がかかって来ると果たして純粋な芸術になれるんだろうかと思うんですよ。若造の意見ですが。でもそれでは生きて行けないんで、すべての芸術家はどこかで妥協しているんじゃないかと思うんです。その妥協点をどこにおくかは、人それぞれでしょうけど。芸術と生活というものは純粋に考えたら折り合いがつかないんじゃないかと思います。

【司会】妥協という問題が出たけど、ヴェルディなんかは作曲で食べていたわけだけど『アイダ』なんかは、第1、2幕がなくともドラマは成立すると思うんですが、お客へのサービスを意識してか、第1、2幕を書いたんだろうけど、でも、それも面白くて、芸術的には落ちてはいないですね。スペクタクルなものが加わって。

【松山】 グランドオペラですからね。

【司会】ヴェルディの場合、ワグナーを聴いて、自分は聴衆に迎合し過ぎたと思ったのか、劣等感を抱いて、最後に今までの自作とは傾向が違う『オテロ』を書いたわけですけど。

【野口】 ワグナーだって聴かせ場がありますよ。

【司会】ワグナーだってやってますよね。例えばタンホイザーのパリ版なんかね。

【野口】 パリではバレエを入れなくてはならないということですね。そのために芳醇な後期様式で改作が行われたわけですけど、却って良くなっていますね。

【司会】そう、良くなってますね。

【野口】 その後、また昔の様式に戻ってしまうんで違和感はありますけどね。

【司会】それはそうですね。でも、妥協しても、芸術を壊さないところがあの人達の凄いところですね。

【松山】 それは作曲家の聴衆に対する対応の話で、我々はそういうものはあまりないですからね。もっと深刻な妥協とは経済的な問題でしょう。そういう面ではワグナーなんかバイエルン王国の財政を崩すほどのお金を使ったわけですから。

先ほど芸術作品とお金とはあまり関係がないのでは...とおっしゃいましたけど、この世に『芸術』という概念が生まれたその時から、お金というものが係わって来ているわけで、絵でもなんでも、ラファエロがローマ法王からどれだけの予算をもらったか、要するにスポンサーですよ。その頃はプロテスタントに抵抗して、カトリックが画家を援助し、画家に絵を画かせたんですよ。ヨーロッパの芸術はみんなそうです。いや日本でもそうです。元禄の文化なんか徳川幕府が援助がなかったら、日本らしい元禄の文化、芸術など生まれなかったでしょう。芸術家とスポンサー、つまりパトロンは、切っても切れない関係にあるんですよ。それが近代化の中で階層というものがなくなり、前世紀(20世紀)の中頃から民主化という流れの中で、国とか、地方行政とか、企業がパトロンの代わりをして来たんですけど、この世の中でしょう。

【司会】今は、国にも企業にもそんなゆとりはありませんね。

【松山】 ですから、お手上げなんですよ。

【野口】 いい聴衆が育って来ている、音楽のハツタリとかを見破って、本当に心に響いて来る音楽を受け止めたいと願っているところ目掛けて演奏するならいいんですけど、今はとてもそんな状況にはないし、むしろ逆に仕掛け人がいて、演奏家もそれに適うような演奏をしようと気を使っちゃうし、一方、聴き手の方も半ば痴呆化して来ているじゃないですか。最近は癒しのミュージックなんて言うけど、あれだけ『癒し』を連発すると、「卑しいんじゃないか」という人もいたけど(笑い)、「癒しを下さい」とか「勇気をもらった」とか、そんなに簡単なものじゃないわけですよ。そんなものは「なんだ」と思わせるような演奏であって欲しいんですけど、今は演奏する側も、プロデュースする側も、聴衆もパワーがないんですよ。それに生演奏というものに対する考え方も変わって来ちゃっているみたいですね。例えばCDしか聴かなくて、それで音楽にすごく詳しい人がいるんですよ。マニアみたいな。

【司会】それは生とは違った別の世界ですね。

【野口】 別な世界ですね。

【司会】でも、こういう時代でも、演奏したい人はするし、聴きたい人は聴くでしょうし。だんだん絞られてくるんでしょうけど、だからそれでもやる、ということは意味があると思うんですよ。

それに、豊かさとは必ずしも物質的なものだけではないでしょう。いまヨーロッパに住んでいる、ある日本の音楽家の話なんですけど、綺麗な家に住んでいるわけでもないし、物質面で豊かな生活をしているわけではないけど、好きな音楽活動も出来るし、アーティストということで、周りも尊敬してくれるし、美術館に行ったり、たまには美味しいものを食べたりも出来るし、自分の生活に満足しているというんですね。ようするにそれほどお金がなくても、ゆとりが持てれば豊だということでしょうね。でも、あんまりお金がないと、ゆとりもなくなるし(笑い)、それが問題ですね。ですから大金持ちにならなくともよいから、やりたい事を続けるためには、そういう地盤を作る必要がありますね。そのためにはみんなで智慧を出し合っていくしかないかな。もちろん自分が努力するという事も必要だけど、励まし合っていくということでも、力にはなるでしょう。

【松山】 そのために、この会(音舞会)があるんでしょう。

【野口】 なんか。うまくまとまりましたね。(笑い)

【司会】私が希望することは、みなさんに音楽を続けて欲しいのですよ。さっきも話がありましたけど、まだまだと思っているうちはフレッシュであり続けられるんだけど、そう思わなくなったら、フレッシュではなくなるんですよ。どうですか、みなさん、音楽を続けて行く意志はありますか。

《松浦》あります。

《小道》死ぬまで続けます。

《植田》もちろん続けます。

《山口》はい。

《戸田》こんな中途半端なところで辞めるわけにはゆかないです。

【司会】私自身もいつもそう思っています。では岩間さん

《岩間》やめられないですね。

【司会】それが大事ですね。そういう気持を持ち続ければ、可能性は常にあると思います。ですから自分の可能性を求め続けることを止められないという気持ちでいて欲しいし、それが『Fresh Concert』をやる最大の意味でしょう。では、このへんでチョンでいいですか。では、まず3月19日の『Fresh Concert』を目指して頑張りましょう。

全員 はい。

(2003年2月2日)

5) "Fresh concert -CMD2004-"のご案内

本会のホームページの掲載内容とリンクさせます。

1) "Fresh concert -CMD2004-"のトップページ

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/concert/Fresh2004info.htm>

2) 出演者紹介(クリック)

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/concert/Fresh04-A.htm>

3) プログラムの概略(クリック)

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/concert/Fresh04-pros.htm>

4) コンサートのチラシ(クリック)

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/kai-info/con09.htm>

5) 座談会速報！ (クリック)

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/kikanshi/zadankai0402htm.htm>

6) 出演者のメッセージ (クリック)

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/concert/Fresh04-message.htm>

7) 会場紹介

<http://www.persimmon.or.jp/>

8) 昨年度開催の "Fresh concert -CMD2004-" のページ

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/concert/Fresh2003info.htm>

6) 会と会員のコンサート日程表 (4 ~ 6 月)

【 4 月 】

6 日 (火) 『 " Fresh Concert " -CMD 2004-
~ より豊かな音楽の未来をめざして ~ 』
めぐろパーシモンホール 18:30 ~

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/concert/Fresh2004info.htm>

9 日 (金) 第 7 3 回 WiZ FRAiDAY CONCERT 野方区民ホール 19:00 ~
出演 : 北川靖子
前売券 1000 円、当日券 1500 円 回数券 5000 円

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/kai-info/con21.htm>

20 日 (火) 北川暁子ベートーヴェン連続演奏会 浜離宮朝日ホール 19:00 ~
<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/kai-info/con12.htm>

22 日 (木) 深沢亮子デビュー 50 周年記念コンサート Part 2
東京オペラシティ・コンサートホール 19:00 ~

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/kai-info/con18.htm>

【 5 月 】

14 日 (金) 第 7 3 回 WiZ FRAiDAY CONCERT
出演 : 北川靖子 野方区民ホール 19:00 ~
前売券 1000 円、当日券 1500 円 回数券 5000 円

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/kai-info/con21.htm>

15 日 (土) 兼永史郎さん (本会会員 《 故人 》 ・ 横笛太郎さん
ありがとうコンサート 新宿文化会館小ホール 14:00 ~

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/kai-info/con41.htm>

17日(月) 「矢澤見どりコンサ - ト」

19:00 ~ 日暮里サニ - ホ - ル・コンサ - トサロン

ゲスト出演: 佐藤光政、入場料 ¥ 2500 (全自由席)

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/kai-info/con29.htm>

20日(木) 北川暁子ベートーヴェン連続演奏会 浜離宮朝日ホール 19:00 ~

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/kai-info/con12.htm>

【6月】

29日(火) 宮谷理香ピアノリサイタル 『バッハからコンテンポラリーへ』
ラシティ リサイタルホール 曲目: 助川敏弥作品他

9:00 ~ オペ

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/kai-info/con35.htm>

2004年4月4日 文責: 中島洋一

メールの宛先: 中島洋一 yoichi_n@wa2.so-net.ne.jp

メールマガジン版 『音楽の世界』 2004年4月号 (第6号)

(完)
